

永正六年（一五〇九）六月、関東管領・上杉頼定の調停により、古河公方・足利政氏とその子・高氏の和睦が成立した。

このとき高氏支持に傾いていた宇都宮成綱をはじめ結城・小田といった豪族は、一旦その鋒を収めて政氏に臣従を示した。

この和睦にあたり、高氏は諱を「高基」と改めた。

そもそも高氏とは、幕府初代将軍・足利尊氏の初名に肖った諱である。それを頂きながら御家を騒がせたことを詫びる、そんな意味を込めたのであった。

これにより、一連の騒動は決着した。

この年一〇月、都で高名な連歌師・柴屋軒宗長が、小弓城の原式部少輔胤隆のもとを訪れた。

この当時、原氏は主家である千葉氏を凌ぐ勢いであった。都の連歌師が到来するということは、まさにそれを証明している。

当時の千葉氏当主は、千葉介勝胤という。

勝胤は文化的なことに執心な人物だったから、原胤隆も多分にその影響を受けたものと思われる。勝胤は古河公方の争乱にあたり、高基擁立派であった。

柴屋軒宗長の上総国訪問は、原胤隆の求めに応じたことである。

高名な歌人である柴屋軒宗長は、その実、小田原の伊勢新九郎入道宗瑞に近い人間だった。

もともと駿河出身である柴屋軒宗長は、今川家内紛の折、めきめきと頭角を表した伊勢宗瑞と懇意であった。こうして諸国を巡っては、時折小田原へ立ち寄り、その情報を売っていたのである。

文化事業とは、立派な間諜活動でもある。

これが、戦国というものであった。

真里谷城に正木通綱が参じたのは、丁度その頃のことである。

「かつて武田家は、我が里見家と親しかった間柄に候」

「さもありません」

「永きに渡る疎遠の溝を埋めたき意を、当主上総介は申しております」

その口上に目を細めて、真里谷信勝は聞き入っていた。

「なかなか有難い話なり。ご承知のことと思われるが、小弓の原ずれば、都の連歌師を招いて悦に入っている。口惜しい限りではあるが、世の中は大義名分が綺羅であること、それが全てなのじゃ。原ずれば家格を上げて、さぞや満足であろうな」

真里谷信勝は口元を曲げた。

「されば、武田の御家も名門甲斐源氏に連なる名家と承っております。家格は原ごときに引けは取りませぬ」

「しかし、いまひとつ」

真里谷信勝は柔和な笑みに似合わぬ眼光を示し、声をひそめる口調で

「里見殿は鎌倉鶴岡八幡宮雪下殿との絆が深いと聞いておる」

と、呟いた。

「滅相もござりません。別当寺のつながりで、およそ格下でござります」

正木通綱は慎重にして慥慥な態度を崩さなかった。こういう外交は慣れている側が有利だ。通綱はこういう交渉に長けていた。

「先般、里見殿は鶴谷八幡宮では盛大なる神事を催されたとか」

「身分相応の神事にござります」

「実は当方も二年前に、倅を筆頭として鶴峯八幡宮を再建してな、鎌倉からの賓客もない寂しい神事でござった」

「さて、なんと答えたらよいものやら」

正木通綱は答えに窮したような仕草で、首を傾げた。

「家格がすべて、これはこの世の倅いだわ」

確かに、そういう時代である。

「家格が高ければ、雑魚でも世を統べることができる。古河公方の諍いがその見本とは思わぬか？」

「さあ、どうしたことか」

正木通綱は真意を計りかね、曖昧な笑みを浮かべるばかりだ。

「里見との同盟は有難いが、ひとつ、土産を無心したいのよ」

「無心、ですと」

正木通綱から笑みが消えて、怪訝な表情に変わった。真里谷信勝はじつと覗き込むように、正木通綱をみた。

「雪下殿の別当・空然殿は古河公方の次子であるな」

「如何にも」

「我らはこれを担いで、千葉介を滅ぼしたいという望みがあるのじゃ」

唐突な申し出だ。

これは迂闊な相槌が出来ないと、正木通綱は身構えた。

「里見家には、武田さまの意に添える力はございません」

当然の応対である。

「いや、書状を託すくらいはの伝手は十分にあるうが？」

あとは正木通綱の言葉が耳に入らないが如く、これを鎌倉へ届けるべしと、一方的に書状を押しつけてきた。それこそ盟約の証とまで云われては、ひとまずこれを預かり

「主の沙汰にて」

と、即断を避けることとした。

正木通綱が辞すると、真里谷信勝は傍らの家臣に

「あれは、かなりの狸であるぞ。儂のことを真里谷と呼ばず、最後まで武田と称してきおった。あのような者を送り込んできた里見上総介も、とんだ食わせものかも知れぬ。気を許すことは罷りならぬ」と呟いた。

この書状を預かった義通は、一考の末、ひとまず鎌倉へ送ることとした。

建前上、里見実堯を名代として、先の鶴谷八幡宮神事の礼という名目で建長寺を巡り、その

足で雪下殿へ赴いた。

雪下殿八正院は、鎌倉鶴岡八幡宮若宮別当寺である。空然は若くしてそこへ送られた、古河公方・足利政氏の次子である。

「里見の者か。過日は盛大に修繕式典をしたそうだな」

若い口上の空然は、里見実堯の挨拶に堅苦しさを隠せぬ表情で応じた。ひとしきり型通りのやりとりを続けたうえで

「実は」

と、里見実堯は真里谷信勝の書状を差し出した。

十十十

割れる家(2)

夢酔 藤山